



Title	日本の近代化と漢詩の位置
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42250
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 福 井 智 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (言語文化学)

学 位 記 番 号 第 1 6 3 5 8 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 13 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

言語文化研究科言語文化学専攻

学 位 論 文 名 日本の近代化と漢詩の位置

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 深 澤 一 幸(副査)
教 授 田 中 美 英 子 助 教 授 中 直 一

論 文 内 容 の 要 旨

漢詩はかつての日本人にとって、最も正統、且つ重要な文学的表現の一形式であった。それは近代以前の日本社会が教養基盤として漢学、そしてその文学表現である漢文学に、多く依存していたことによる。しかし今日、漢詩と言えば、一部の専門家及び好事家の専有物とのみ見なされ、一般的にはかなり馴染みの薄い文学となっている。それは明治維新以後の西洋化、近代化の流れの中で、教育内容の変化、西洋近代文学等の輸入の為に、かつて有した漢詩の制作習慣、そしてその鑑賞能力の多くを失ってしまったことに関係する。

だがそもそも明治時代、特にその初中期と言えば日本漢詩の一大ピークであり、漢詩が最も広く社会に普及した時期であった。勿論、現役の日本文学としての有効性は、その制作習慣の衰退の為、この時期を境に急速に失われる。しかし古典の見直し、外国文学研究の影響によって漢詩に対する文学研究、翻訳への取り組みが始まる。また更には小説等がその題材として、漢詩および漢詩人を取り上げだす。これらは主として、漢詩の再解釈、再認識への取り組みと言えるもので、漢学教養が失われた今日では、漢詩受容の大きな部分を占めつつある。つまりこういった一連の動きから見ると、近現代日本における漢詩の受容には、かなり豊かな様相が確認されと言える。またその周辺に観察される言語、文学そして日中関係事情も併せれば、それらは決して等閑視すべきでないと思われる。

以上のような考えから、本論文では明治以後の日本での漢詩受容について、「新聞」「アカデミズム」「翻訳」「史伝、私小説等の文学作品」の四視点からの検討を試みた。

第一章 明治以前の漢詩の変遷

本章では明治以前の漢詩について、漢字伝来の五世紀ごろから江戸時代末期までの、その変遷をまとめる。江戸時代漢詩の要点のみを言えば、漢学が社会的教養として普及した為に、漢詩は支配階級から庶民まで、幅広い層で親しまれる文学形式となる。またその技術水準も飛躍的に高まり、幕末期には日本人独自の詩風さえも確立するに到っていた。

第二章 新聞と漢詩

明治漢詩の盛況ぶりを伝える一例として、漢詩の新聞掲載はしばしば指摘されてきた。しかし従来はそれに関するまとまった記録や研究はなく、具体的な内容および形態が殆ど解らなかった。そこで本論文は、『大阪朝日新聞』、

『大阪毎日新聞』を対象に漢詩掲載状況を調査し、その実態の解明を試みた。調査方法は、両紙とも明治二十二年から大正十四年までの各七月の紙面を中心に、漢詩掲載の日数、及びその紙面の様子を確認した。結果としては、両紙ともに漢詩掲載の開始はおよそ明治三十年頃であり、終了は『大阪朝日』が大正十三年、『大阪毎日』は大正七年であった。その間、いわゆる漢詩壇として「朝日詩観」（『大阪朝日』）、「毎日詩壇」（『大阪毎日』）が設立され、俳句、短歌とともに新聞紙上を賑わせていた。しかし漢詩の場合は俳句や短歌と比べ、そのコラムのあり方にかなりの違いが見られた。それは、俳句や短歌には読者参加型のコラム形成指向があったものの、漢詩にはそれが殆どなく、専ら担当者を中心とする限られたメンバーで運営される傾向が強かった。その為、時代が進むにつれ、俳句や短歌のコラムにおける盛況に反し、漢詩は次第に生彩を欠いていく様子が確認された。またこの他に、漢学教養の衰退、漢字制限といった、漢詩を取り巻く環境変化もあった。このような一種の閉鎖性と社会事情の変化の為に、漢詩は大量印刷、大量販売の新聞に適さず、また更には近代日本文学の中央からも、撤退を余儀なくされたと思われる。

第三章 アカデミズムと漢詩

本章では、明治以降の「漢学」と漢詩の関係について、主として学校教育における漢文教育、そして大学における中国研究の各変遷からの考察を試みた。まず前者では、漢学塾の衰退と学校教育の整備、そしてその中での漢文教育の変遷に注目した。このうち、中学校における漢文教育の制度変化について言えば、それには学習負担の軽減やイデオロギー的役割を求める傾向が強く見られた。この為に学制以降の多くの若者たちは、漢文教育によって漢詩鑑賞能力は勿論、中国文化・文学の精粹さえも得難くなったと言える。それから後者については、『帝国文学』『雑報』中に見られる「漢学」「漢詩」への各批評、及び中国文学研究の成立を通じて、漢詩への認識変化を考察した。ここで確認されたことはまず、アカデミズムが、「漢学」から哲、史、文と細分化された「支那学」「中国学」への移行を目指す中で、「漢詩」は「漢学」から分離される。そしてその制作の方は、近代日本文学の中に流れ込み、一ジャンルを形成する。しかしそこでの「漢詩」は、ナショナリズムの高まりによる国民文学、また近代日本語希求への意識とは対立概念となり、結果的には、近代日本文学としての位置を維持しがたくなる。一方、中国文学研究の中で漢詩は、他の俗文学など共に、「漢学」伝統に囚われない新しい分析、解釈の対象となっていく様子が確認された。

第四章 翻訳と漢詩

ここではまず、漢詩和訳への専門家、非専門家の各取り組みについて、その特徴を検討した。一般的に、漢学伝統の束縛が少ない非専門家の方が漢詩和訳への取り組みがはやかった。土岐善麿、佐藤春夫らにより、西洋詩の刺激を受けた様々な業績がここからは生み出されている。一方、専門家の間でも、その研究上で漢詩の翻訳には有効性が認められ、やや遅れながらも次第に定着していく。それは、漢詩文集の編纂上において、訓読以上に訳詩が重要視され、そして充実していく様子において、顕著に見られた。それから漢詩和訳の実例として、土岐善麿の業績について、特に注目してみた。具体的には、『鶯の卵』と杜甫詩の訳業を中心に、訳詩における土岐の言語観の反映や、また訳詩の技法やその特徴、またそれらへの客観的批判等の考察を行った。漢詩和訳への極めて早く、且つ息の長い取り組み、国語国字問題との関係、また古典、現代両中国文化への強い関心など、土岐の存在は近現代日中文化交流史を考える上で、極めてユニークな位置を占めていたと思われる。

第五章 描かれた漢詩人たち

近現代日本文学における漢詩の受容法として、前章の漢詩の翻訳に引き続き本章では、漢詩や漢詩人の再解釈に取り組んだ散文作品に注目した。具体的には、永井荷風の『下谷叢話』（大正15）、中村真一郎の『頼山陽とその時代』（昭和46）、清岡卓行の『詩礼伝家』（昭和50）などの作品を取り上げ、各作品における著者らの漢詩、漢詩人への認識とその描写法、そして再解釈の方向性を検討した。まず、荷風、中村作品はともに、その形式や方法の多くを森鷗外の史伝に学ぶ。膨大な漢詩を基本資料として活用し、漢詩を中心に発達した、江戸時代から明治初期の漢詩人社会を描き出したことは、これらの大きな特徴であった。そしてこういった取り組みは、漢詩や漢詩人たちを日本の歴史、文学史のなかに明確に位置づけることで、それらが有した存在感の大きさを、存分に提示し得たと言える。清岡作品の場合は、大正、昭和期の漢詩人、阿藤伯海の人柄と漢詩人としての生き方に、焦点を置く。恩師である阿藤に対し、

その人間性と文学性への深い尊敬が、清岡の描く阿藤像や漢詩文への解釈には溢れる。しかし著者にはそういった個人的な思いと共に、阿藤に代表される日本漢詩の存在とその歩みについて、日本文学史に再認識を強く促すねらいがあった。阿藤の漢詩の中に、積極的に西洋近代文学の影響を見出し、その豊かな創造性を指摘する姿は、まさにその意識の反映であった。

これらの作品は皆、ある種の「反近代」的視点によって成立したものであった。しかし漢学教養の失われた今日の社会に、新しい漢詩の鑑賞法—西洋近代の詩的感觉で捉える方法—を存分に提示し、また普及、浸透させた点では、専門研究以上にその影響力は大きかったと思われる。

以上、明治以降の漢詩への視点からは、漢詩の再解釈、再認識に止まらず、前近代と近代の断絶と連続、また日中文化交流の変遷等、多くの諸相が観察されるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代に隆盛をきわめたが、その後は衰退の一途をたどったとされる漢詩と漢詩人の様相を、主に明治から大正にかけて時代をしほり、近代化を反映した「新聞」「アカデミズム」「翻訳」「史伝、私小説等の文学作品」の四視点から検討したものである。本論文は、江戸でおわりとされていた漢詩という文学ジャンルがじつは明治以降も継続していたのだという、一般には見落とされがちな事実を掘りおこしている。とくに、明治から大正までの新聞掲載を丹念に調査するという実証的方法で、その事実を提示し、きわめて説得力をもっている。

また、漢詩と密接な関連をもつ漢文教育の動向を、学校制度、アカデミズムの検討により探求し、その衰退のさまを明らかにしている。

また、漢詩の訓読から口語訳への変化が、同時期のヨーロッパ文学の翻訳と連動していることを明らかにした点も、きわめて有意義である。

また、最近になっての江戸時代の漢詩人の発見、再評価が、西洋近代の知識をもった中村真一郎らによってなされていることの指摘も、漢詩と近代化との通底を示したものといえよう。

以上のごとく、本論文は、漢詩と近代化という論点を、多方面に広範囲にわたって実証的に検証し、この方面の研究に新しい視角を導入したものとして、その独創性を十分に評価できるものである。

ただ、「近代化」ということはそのものに対する理解、漢詩翻訳における従来の訓読と新しい口語訳との比重のかけかた、また庶民・大衆といった語の使用について、著者もまだ充分には消化しきれていない嫌いはのこる。しかし、それも、本論文の価値を損なうものでは、決してない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと判断する。